



Title	未来共生学第6号の刊行にあたって
Author(s)	栗本, 英世
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72111
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

未来共生プログラムのジャーナル『未来共生学』は、2013年度に刊行が開始された。創刊号の「巻頭言」で、編集委員長を務めていた私は、「未来共生プログラムは形成途上にある」と位置付け、続いて以下のように述べている。

『未来共生学』第6号 刊行にあたって

未来共生プログラムの「形成途上」という特性は、このプログラムが、現実に存在する社会や文化ではなく、ちかい将来に実現されるべき、

あるべき社会や人間同士の関係のあり方を出発点と到達点にすえていることに由来する。社会や文化の現実態や過去に存在した様態を対象とする場合は、実証的な研究も可能であるが、いまだに存在していない、より正確には萌芽的あるいは潜在的に存在するものを正面から取り扱うことは容易ではなく、試行錯誤を重ねざるをえない。

こうして、未来共生プログラムに参加した学生と教員は、6年間にわたって試行錯誤を続けることになり、本ジャーナルはその記録と発信の媒体として機能してきた。「本プログラムにかかわるすべての人びとが共有するフォーラム」を構築することを意図して創刊された本ジャーナルは、その役割を果たしてきたと言える。

本ジャーナルは、編集委員会が企画した特集を毎号掲載したほか、大学院生たちが投稿した論文や研究ノート等を掲載してきた。本号に収録された今井貴代子助教の記事にあるように、これまでの6巻に掲載された論考は89本に達する。これらは、大学院生たち自身による未来共生をめぐる思考と実践の成果である。そのテーマは、「学校／教育」から「戦争／紛争／内戦」「震災／地震／防災」「援助／協力／介助」などにわたり、本プログラムが取り組んできた未来共生の諸課題とよく対応している。

博士課程教育リーディングプログラムに対する文科省の助成が、本年度をもって終了することに伴い、本プログラムは一区切りを迎えることになる。幸いなことに、日本学術振興会に設置された委員会による事後

評価において、本プログラムは「A」評価を獲得した。来年度から、未来共生プログラムの運営は人間科学研究科に移管され、大阪大学本部からの財政的支援を受けつつ、プログラムを継続していくことになる。

この節目の時期に刊行される『未来共生学』本号には、「未来共生学の到達点と課題」というテーマのもとに、運営統括会議メンバーによる座談会と、運営にかかわってきた特任教員、さらにプログラム履修生たちが執筆したエッセイを収録した。本プログラムと直接のかかわりのない読者の皆さんにも、未来共生という理想の実現を目指す試行錯誤の過程と現時点での到達点をご理解いただけるのではないかと考えている。

さて、これまでの体裁で刊行されるジャーナルは今号が最後になる。この機会に、編集委員会委員の先生方、第4号と第5号の編集委員長を務めてくださった脇阪紀行先生、編集事務局の重責を担ってくださった今井貴代子助教、および本ジャーナルの刊行にかかわったすべての方々に厚く御礼申しあげたい。

本プログラムの人間科学研究科への移管に伴い、本ジャーナルの編集も、同研究科の未来共創センターが担うことになる。現在、編集委員である渥美公秀教授を編集委員長とする新体制のもとで、『未来共生学』は新たなかたちで継続して発刊される予定である。

未来共生を構想し、実現するための試行錯誤は、これからも続く。

2019年3月4日

『未来共生学』編集委員会委員長
大阪大学大学院人間科学研究科

栗本 英世